

企業における情報専門職のこれまでとこれから： エンベディッド・ライブラリアンの台頭と今後の課題

豊田 恭子*

筆者が20年前に外資系金融機関で運営していたビジネスリサーチセンターでの仕事と、現在、広報エージェンシーで行っている仕事とを比較しながら、企業における情報専門職の役割が、情報収集から情報選択に移行していることを確認する。加えて、現在、アメリカで注目されているエンベディッド・ライブラリアンに光をあて、彼らが生まれてきた背景と、彼らを受け入れる利用者側の変化について考察する。最後に、これからの情報専門職の役割として、フィルターバブルに風穴をあけることを提言する。

キーワード：企業図書館、情報専門職、インフォプロ、情報収集、情報選択、エンベディッド・ライブラリアン、フィルターバブル

1. はじめに

20年前、私は、外資系金融機関のビジネスリソースセンター（企業内ライブラリ）で、社員向けの情報提供サービスに携わっていた。今から思えば分不相応な広々としたスペースをあてがわれ、スタッフは私を含めて4人。参考図書や専門資料を配架し、データベースにアクセスできる端末を揃え、テーブルと座席を並べた利用者スペースもあった。

今、私は広報エージェントに雇われて、在宅で情報検索とリサーチを行ない、東京で働く会社の同僚や、弊社のクライアントに向けたサービスを提供している。札幌の自宅にあるのはネットに繋がれたPCだけ。時折、東京に出向いて打ち合わせに参加するほかは、基本的に電話とメールでやりとりしている。

——こうした変化は、あくまで私の転職という個人的事情によってもたらされた結果なのだが、おこがましさを承知で言えば、企業における情報専門家の役割の変化を象徴しているとも見ることができ、できなくはないように思う。

そこで本稿では、私の20年前と現在の仕事を比較しながら、企業における情報専門家が担わされている役割の変化について考えてみたい。併せてアメリカで起きているエンベディッド・ライブラリアンたちの活動も参考にしながら、今後の私たちの課題について、私論を述べたいと思う。

2. 情報収集から情報選択へ

2.1 情報収集の時代

1990年代半ば、インターネットはまだ勃興期で、社員にデータベースへのアクセス権はなく、私たちの主要な役割のひとつは、情報収集だった。

来訪してくる社員から、たとえば「ある業界について調べてほしい」と言われると、まずは参考図書で当該業界に

ついでの基本事項を確認し、関連文献をリストアップし、雑誌の棚から記事を拾う。原典にこだわり、必要とあれば外部から取り寄せる。統計月報の最新号から関連の数字をコピーし、データベースで関連新聞記事を検索して、テキスト・データを出力する。

必要にして十分な既知情報の収集に主眼がおかれ、重要と思われる関連データや雑誌論文、新聞記事などは原則的にすべて拾った。

付箋をつけた図書や雑誌、PCから出力した紙やコピー、その他もろもろを積み上げ、漏れがないことを確認したら、利用者呼び出し、「これでどうだ」とばかりにどさりと手渡す。あとは、その利用者が、渡した資料をベースにして、その業界について勉強してくれればいい。これでレファレンス1件終了、という感じだ。

ライブラリには専門雑誌や灰色文献、高額のデータベースが揃えられていたし、そうした一般利用者にはなじみの薄い資料やデータベースの使い方に精通しているのが、私たちの強みだった。

名前（＝ビジネスリソースセンター）が象徴していたように、ライブラリは、あらゆるビジネスリソース（＝情報源）にアクセスするゲートウェイとして機能していた。

2.2 情報を選び、まとめる時代へ

私は2001年にそこを退職し、その後は商用データベースを開発・運営する事業などに関わっていたが、5年前、現在の広報エージェントに採用され、久しぶりに情報専門家としての仕事に戻ってきた。

今も「〇〇について調べて欲しい」という依頼はよくある。

繰り返しになるが、私は今、何か特別なツールをもっているわけではない。日経テレコンやファクティバといった記事データベースは、（それを使いこなせるかどうかは別にして）社員全員がアクセス権をもつ。ネット検索で使うのも、一般的な検索エンジンと、ブログなどのソーシャルネットワーク（SNS）上のコメントを対象にした分析ツール（これも社員全員がアクセス権をもつ）があるくらいだ。

*とよだ きょうこ パーソン・マーステラ
〒005-0022 札幌市南区真駒内柏丘 6-3-3
toyoda_kyoko@nifty.com (原稿受領 2014.11.24)

それなら他の社員も自分で調べられるではないか、と思われるだろうが、人は今、ありすぎる情報にむしろ困っているのだ。

最近、話題になっているトピック。あるいは以前に、世間を騒がせた事件。何らかの理由でその事項を確認する必要が生じたのだが、あまりに直近すぎてウィキペディアが整理されていない。あるいはネットで検索してみたら何百という記事だのブログだのがヒットして、いったいどれを読んでいいかが分からない（全部なんかとも読んでられない）。だから、ちょっとまとめてくれないか、というのである。

「読むべき記事を1~2件選んで」、と言われたりもする。

そこで、どれを読むべきかを探ることになる。それは記事のこともあるが、オンライン雑誌のコラムかもしれない、誰かのブログかもしれない。うまくまとめたものがなければ、私があちこちを参照しながら自分でまとめてしまうこともある。

そこではもはや、原典も、網羅性も求められない。何か特別な資料を取り寄せることもしない。

ネット上に溢れている情報のピースをスクリーニングし、ゴミをすべてそぎ落とし、エッセンスを抽出するのが私の役割だ。

もう少し大きなリサーチもある。

最近の業界動向だったり、政府の政策だったり、主要各社の動きだったり。

その場合も、入手に時間がかかるような資料の取り寄せは、もう殆ど依頼されない。私がアクセスできる情報源の限界を口にする、「手元で取れる情報だけでいいから、まとめて」、と言われたりする。

そこで手元のツールで情報収集をやったら、もうそれだけで切り上げることになる。そして入手したデータを分析し、読むべき資料を厳選し、ポイントごとに項目立てをして、要点をまとめることに、時間と力を割く。

クライアントに直接提出するような場合は、さすがに典拠には気を遣い、抑えるべき情報源は漏れがないよう心掛ける。それでも喜ばれるのは、書誌データのリストではなく、1ページにまとめられたエグゼクティブ・サマリのほうだ。

もしかしたら、研究者たちは違うのかもしれない。しかしビジネスの現場では、網羅的な情報の収集を人はもうあまり求めない。

選んであげることが、喜ばれる。

まとめてあげること、対価を払う。

そういう時代になったのだ。

3. エンベディッド・ライブラリアン

3.1 エンベディッド・ライブラリアンの登場

エンベディッド・ライブラリアン (embedded librarian) という言葉に私が出会ったのは、実は最近のことである。米国ではもう、5年ほど前から注目されてきたようだ。

この言葉を最初に日本に紹介したアリゾナ大学の鎌田均

によれば、2003年のイラク戦争で戦闘部隊と一緒に行動した記者をエンベディット・ジャーナリストと呼んだことに由来した言葉で、チームの中に“埋め込まれ”あるいは“組み込まれ”て活動するライブラリアンを指すという。

20年前は、利用者がライブラリ施設を訪れていた(図1)。そしてライブラリアンは、彼らのリクエストを聞き、それに応じて専門ツールを駆使しながら、求められている情報を収集して、提供していた。

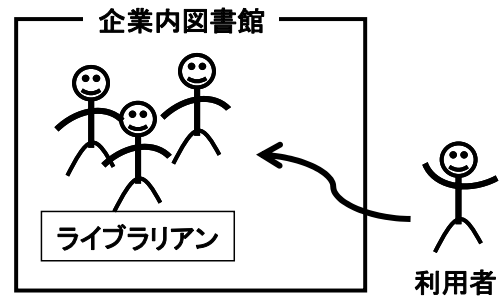


図1 20年前のイメージ

今は、ライブラリアンが利用者のほうに向かう(図2)。彼らのプロジェクトを理解し、それに必要なデータを自ら探してきて渡す。プロジェクトの一員として、その遂行を社員と一緒にやって行なう。

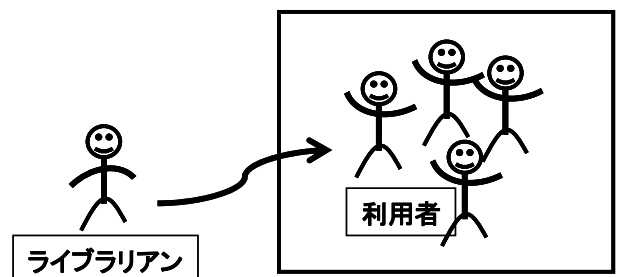


図2 現在のイメージ

これを聞いて、今更ながら私自身もまたそうした働き方が増えているのに気づかされた。

私の場合、普段は自宅で仕事をしているので、それほど組織に“組み込まれて”いる実感はないのだが、それでも会社が何か大きな提案をクライアントに持って行こうとするときなどは、チームの会議に呼ばれるようになっている。そしてまさにプロジェクト・チームの一員として、提案成功のための情報収集や分析を担当する。顧客に対する提案文書の一部が私が書くこともある。提案の背景となるような現状分析のパートが、私の担当になることが多い。

もちろんライブラリアンのこうした活動は、そう新しいものではない。特に医療の分野では、昔から医師と一緒に動いてきた。それが10年ほど前から、法律事務所や一般企業、専門図書館で広がり始め、大学図書館にも波及し、最近では公共図書館でも、“埋め込まれた”ライブラリアンの事例が見られるという²⁾。

私が企業内ライブラリで活動していた 1990 年代も終わりのころには、“エンベディッド”という言葉こそ聞かなかったものの、すでに米国ではそういう活動が始まっていた。会社の新製品のマーケティング・キャンペーン・チームに加わって活動した、組織のナレッジマネジメントを統括する部署で認められた、などなど。

アメリカの専門図書館協議会 (SLA) は、そうした事例が出るたびに、私たちの“スター (星)”として称賛し、彼らに学ぼうと呼びかけていた。当時の知り合い (アメリカ人) の一人も、ライブラリから企業戦略室に異動して、そこで仕事をするようになっていた。

今でこそ注目されて、エンベディッド・ライブラリアンになるためには何が必要か、といった論文が書かれたり、セミナーも開催されたりしているようだが、当初は皆、それを敢えて目指していたというより、組織のニーズに応えながら、自分たちのキャリアアップを図っていったら、結果としてそうなった、という感じだと思う。

2009 年に SLA が行なった調査では、59.7%の人が、すでにそういうサービスを 10 年以上やっている、と答えている³⁾。

皆、私と同様に、言われてみたら、自分もエンベディッドの仕事をしているわ、ということになったのだと思う。

3.2 エンベディッド・ライブラリアンが登場した背景

かつての企業ライブラリアンたちが、徐々に組織に“組み込まれ”ていくようになった背景は、私にも容易に想像がつく。

最も大きいのが、やはりインターネットの登場だ。

かつてはライブラリ施設内にしかなかった専門資料もデータベースも、ほぼすべてがネット上に移管され、利用者たちはライブラリを訪れる必要を感じなくなった。情報収集活動のほとんどは、机上の PC で行われる。だとすれば、ライブラリアンたちもまた、活動の場を移さなければならぬ。

そしてリーマン・ショック後の不景気が追い打ちをかけた。情報収集活動がネット上で行われているのに、別施設を維持する意味があるのか。施設はコスト削減の対象となり、多くの企業ライブラリは場所を失った。

当時、施設が閉鎖され、まったく別の部署に異動になった人もいた。情報専門家としての仕事を続けたいがために、転職した人もいた。その一方で、施設から出て、他の社員たちと一緒に机を並べて座り、彼らと同じ環境に身を置きながら、仕事を続けたライブラリアンたちもいた。その物理的な環境が、“組み込まれ”る状況を促進したといえる。

そして第 3 に、ライブラリアンたちの意識も大きく変化した。会社が倒産するかもしれない (あるいは自分が解雇されるかもしれない) といったプレッシャーの中で、当然のことながら、ライブラリの論理よりも、会社の論理を優先するようになった。

かつてはライブラリの“業務時間”というのがあり、時間外に受けたリクエストは翌日に回させてもらうとか、

検索結果を手渡した後、それをまとめるのは利用者側の仕事、といった棲み分けが存在していたのだが、そういったことは徐々に通用しなくなった。明日までに仕上げるべき提案書があるなら、他の社員と一緒に残業をする。組織の役に立っていることを認めてもらうために、最終アウトプットの作成にも参加する。自分の価値を組織内で“売る”ために、自ら率先して役立ちそうな情報を集めてきて、関係者に渡す。

こうしたことは米国だけでなく、私の周辺の外資系企業でも程度の差こそあれ、少しずつ広がっていたと思う。

1990 年代の終わりころ、当時の SLA で、“getting out of box (箱から出よう)”が合言葉ようになっていたの思い出す。「箱」はライブラリの壁も意味していたが、私たちの中の既存概念、ライブラリアンの仕事はこういうものだという思い込みも表現していた。そこから脱し、新しい環境の中に一步を踏み出し、新しいプロフェッショナリズムを目指して生きていこう、——そんなコンセプトが盛んに議論された。

そして 4 つめに (これはあまり指摘されていないことなのだが)、利用者側もライブラリアンの価値を再認識したという側面があるのではないかと私は見ている。

3.3 利用者側の認識の変化

インターネットが登場したとき、「もう図書室はいらない」と口にした経営者は多い。「自分たちでデータベース検索ができるようになったら、もうライブラリアンに頼むものはない」と豪語した利用者もいた。

ところが一緒に仕事してみると、意外とライブラリアンが“使える”ことに気づくのだ。

前述したように、私も最近クライアント向けのプロジェクトに参加することが増えている。私は広報戦略については何も分からない。それでも会議に参加してみると、自分の知っている情報源が彼らのプロジェクトを支援できることがわかる。

「それなら政府統計でバックアップできる」

「それならたぶん調査レポートが出ていると思う」

「そういう情報は専門誌を追いかければ出てくる」……

ライブラリアンは、彼らの提案を成功させるためにはどんなデータや情報源が役に立つかを考えることができ、そしてそのデータはどうやったら入手することができるかを知っている (あるいは予想することができる)。

ライブラリアンとしての教育を受け、訓練を重ねたからこそ身につけた知見は、ネット社会になった今でも結構有効なのだ。

しかし残念なことに、ライブラリアンのこうしたスキルは人に説明しづらく、一般にもあまり認知されていない。

情報があまりに周りに溢れているために、人はともすると、情報を見つけることは難しくない、と誤解している。あるいは自分が、情報を本当には探せていないことに気づいていない。だからライブラリアンの助けなんかいらぬ、と思うのだ。

ところがライブラリアンと一緒に仕事してみると、自分が見えていない情報が、世の中にはこんなに沢山あったのか、と驚くことになる。そして自分でもそれを探してみようと試みて初めて、検索エンジンではそれを見つけないことに気づくのだ。

「あなたのリサーチ結果をつけると、提案に説得力がうまれるから」。私にプロジェクトへの参加を求めた上司が、そう言ってくれたことがある。ライブラリアンとしての面目躍如、名誉回復を成し遂げたような気分だった——、と言ったら大げさだろうか。

そして、箱から出たライブラリアンたちを受け入れた他の企業においても、随所で今、こういう周囲の認識の変化が見られているのではないかと、私は想像している。

情報収集なんて誰でもできると思っていた人々が、情報専門家の仕事を間近で見た時、その存在意義を再評価する。いらないと思っていたライブラリアンが、横に座ってくれれば、なんて便利で、自分の力になりうるかを学習する。

そうした受け入れ側の変化も、今、米国でエンベディッド・ライブラリアンが増加している背景にはあるのではないか、というのが私の推論だ。

3.4 エンベディッド・ライブラリアンの特徴

米国の多くのライブラリアンたちが、いつの間にか“組み込まれ”ている状況だったとしても、何をもってエンベディッド・ライブラリアンと言うのか、それをきちんと定義づけようとする動きもある。

エンベディッド・ライブラリアンについて最も活発に発言しているデビッド・シューメイカの著作やブログ⁴⁾、ベネッサ・ハリス⁵⁾、ホリー・リッチオ⁶⁾といった人々が言っていることを私なりにまとめてみると、エンベディッド・ライブラリアンは従来のライブラリアンと異なった、以下のような特徴をもっている。

- ・軸足がライブラリではなく、利用者側にある
- ・手助けするのではなく、組織（チーム）の一員となる
- ・個別の依頼に対応するのではなく、継続的な関係をもつ
- ・待つのではなく、先手をとって能動的にかかわる
- ・定型化されたサービスではなく、目的に即してカスタマイズする
- ・自己の役割を限定せず、状況に応じて変化させる

改めて並べてみると、これらの特徴は、施設から出たライブラリアンたちが、その後、それぞれの企業の中で、様々な努力を重ねた結果、到達したものなのだと強く思う。

「ライブラリを出るのは、ライブラリアンとしての後退だとあなたは思うかもしれない」。2009年、エミー・モールは自身の経験をからませながら語っている。「でも私は、これが前進なのだと信じている」⁷⁾。

自分のもつスキルを組織のなかでどう生かしていくこと

ができるのか、利用者の中に身を置きながら、試行錯誤を繰り返してきた軌跡が、今、ひとつの職として結実しようとしている。そして目に見える集団を形成し始めてきているのだ。

これが今後、大きな潮流となり、企業内の情報専門家がすべて、エンベディッドになっていくのか。——それは今の私には分からない。

公共図書館などでは、従来の“場”としての図書館の役割が見直される傾向にあるという。企業においても、従来モデルの良さがまた語られ始めることがあるのか。あるいはまた違うモデルが登場するのか。

企業における情報専門職の在り方についての議論は、今後も続いていくことになるだろう。

3.5 エンベディッド・ライブラリアンの課題

ライブラリアンが組織に組み込まれたときに遭遇する、いくつかの課題もすでに多く指摘されてきている。

第一が孤立感だ。

図1で示したように、かつてのモデルでは、ライブラリの中に同じ仕事をする仲間がいて、同じ言語を話し、仕事を分担し、問題意識を共有し、悩みを相談してきた。

エンベディッドになると、ライブラリアンは一人になる。情報専門家として抱える問題を共有する人が周囲にいなくなる。

そのことは後継者育成の問題にも繋がっている。米国の事例では、複数のエンベディッド・ライブラリアンが企業のあちこちの部署に配属され、組み込まれているケースもあるようだが、そうした場合でも、基本的にライブラリアンは一人で、それぞれの部署内で活動する。

その部署に深く入り込み、自分が提供する情報がどのようなプロセスを経て、どのような形にまとめられるのかを理解することは、優れた情報サービスを行うのに必須の知識とわかっていい。しかし、その知識は他のライブラリアンと共有されることはなく、継承もされない。

これまでのライブラリにおいても、レファレンス・サービスは個人芸の側面が強く、スキルの共有や継承が大きな課題とされてきた。しかし今後はますますその問題が大きくなることが予想される。

もうひとつ、規模の拡大が図りにくい、という課題がある。

かつてのビジネスリサーチセンターでは、私たちは4人でおおよそ200人くらいの利用者を相手にしていた。

だがエンベディッド・ライブラリアンとして複数のチームに組み込まれるのは、そう簡単なことではない。

私の場合でいえば、ひとつのチームの案件に組み込まれたら、もうそれだけで手一杯だ。複数のプロジェクトがたまたま重なったりすると、もうお手上げ状態になる。「大変ならアルバイトをつけたら」と言われたこともあるが、現在の仕事はバイトに手伝ってもらえるような部分が少ない。かつてのライブラリ業務のように、作業の一部を切り出して他者に委ねることが極めて難しくなっている。

シューメイカが今年の SLA 大会で開催したワークショップでは、エンベディッドになった場合のリスクのひとつとして、過重労働があげられていた⁹⁾。“いると便利”であることが周知されると、今度は逆にお呼びがかかりすぎるといことだろう。

かつては、利用者が増え、リクエストが増え…というのが、ライブラリの発展を示す重要な指標だった。それが次の予算を獲得し、スタッフ増員を要求する際の、最も有力なカードだった。

エンベディッドの環境では、そうした量的な増加を発展系として描くことは難しい。

それでは何をもって成功というのか——。エンベディッド・ライブラリアンの評価方法もまた、今後の課題の一つである。

そして最後に、このまま組織に組み込まれていき、組織の価値観を優先し続けたときにどうなるのだろうか、という懸念も頭をかすめる。

組織に入り込み、一人で仕事するようになると、ライブラリアンのネットワークから切り離されてしまうケースが多い。

組織の求めに応じることが優先され、かつてライブラリアンとして重視していたことが徐々に薄れていくのは、いかんともしがたい。

先に私は、「もはや原典も、網羅性も求められない」と書いた。

時間をかけて文献を取得するようなことは、もう誰も私に求めてこない。

だが「求められていない」からと言って、そこにこだわることを捨ててしまってもいいとも思わない。ウィキペディアに書いてあることを、何の検証もせずにそのまま利用者に渡すようになったら、それはもう、情報専門家とは呼べないだろう。

“読むべき情報”をスクリーニングするのは、ある程度の網羅性を担保しているからこそ適切にできる。決して検索エンジンの一番上に出てきたものを拾っているわけではないのだ。どういう文献が現在、世の中に出ているのか、その全体像をある程度、俯瞰したうえでこそ、何を読むべきかが判断できる。そのことは、肝に銘じていなければいけないと思う。

3.6 フィルターバブルを越えて

イーライ・パリサーが 2011 年に指摘したフィルターバブルという現象がある⁹⁾。ネットのフィルタリング技術の発達によって、今はオンライン検索の結果だけでなく、たとえば日々のニュースの閲覧などにおいても、人は、自分の好きな事柄や聞きたい情報にのみ囲まれて過ごすようになっていく。それはつまり、自分の嫌いな事柄や聞きたくない情報から隔離されていることを意味する。

そしてヘーゲル&ブラウンによれば、この情報の閉鎖性は、人が得る経験の範囲を徐々に狭め、人を無能にし、予期せぬ新たな方向からやって来る出来事やトレンドに対し

て無防備で、不意を打たれやすくしているという¹⁰⁾。

これは残念ながら、日本でもよく目にする光景だ。

人はともすると、自分の思い込みをバックアップしてくれるような情報ばかりを集めてしまう。そしてこれでいいのだと確信してしまう。自分とは違う意見を持っている集団が、この世の中には確実に存在していることを忘れてしまう。そしてそのまま行動を起こしてしまっ、思いもよらない結果を招き、痛い目にあったり、失敗したりする。

毎日のニュースを見ていれば、事前調査をやらなかったのだろうか、と疑いたくなるような失敗事例にしょっちゅう出会う。

あるいは「調査」をやっても、彼らは自分たちが聞きたいことだけを聞いたのかもしれない。自分たちの世界の外にいる人たちの情報を、きちんと届ける人が彼らの傍にいなかったのかもしれない。

私は、これからの情報専門家の役割は、このフィルターバブルを破ることではないかと思っている。

会社の経営者たちが、さまざまな情報の利用者たちが、ちゃんと正しい判断ができるように、現在の状況を正しく反映した情報を選択し、届けてあげること。たとえ最終判断は同じであっても、自分の思い込みだけで下した判断と、反対意見を知ったうえで下した判断とでは、その質が違う。遭遇するであろう抵抗や困難を予期し、準備をして臨むことができれば、避けられる失敗はたくさんある。

検索エンジンを使っているは見えてこないもの、普段、その人の周辺では聞こえてこない意見、あるいはその人が探してさえいない情報、でもこの世の中で確実に存在している何か。それらをちゃんと拾って見せてあげること、そして情報の閉鎖性に少しでも風穴を開けること。

それができて初めて、単に便利なものではない、価値のある存在になれるのだと思う。

組織の中に身を置きながらも、組織の論理だけに飲み込まれず、組織の外の世界を、情報を通じて、きちんと組織内に入れていく仕事。情報専門家として、今後はそんな仕事を目指せたら、と思っている。

注 記

(URL は 2014 年 11 月 20 日参照)

- 1) 鎌田均. 動向レビュー:「エンベディッド・ライブラリアン」: 図書館サービスモデルの米国における動向. カレントアウェアネス. 2011, No.309, p6-9. <http://current.ndl.go.jp/ca1751>
- 2) 地域コミュニティに飛び込んでレファレンスを行う—公共図書館におけるエンベディッド・ライブラリアンの事例. カレントアウェアネス 2012 年 6 月 18 日 (<http://current.ndl.go.jp/node/21125>) に下記の紹介記事がある. Community Reference: Making Libraries Indispensable in a New Way. American Libraries Magazine. 2012.6.13
- 3) David Shumaker and Mary Tally. Models of Embedded Librarianship Final Report. Special Library Association, 2009 <http://embeddedlibrarian.com/2013/04/13/models-of-embedded-librarianship-final-report/> 文中で引用した設問は、Appendix p.A-20 に見られる。
- 4) David Shumaker. The embedded librarian ; innovative strategies for taking knowledge where it's needed.

Information Today, 2012

また彼はブログ上で多くの論文や講演録を発表している。

<http://embeddedlibrarian.com/>

- 5) Venessa Harris. What does 'Embedded Librarian' mean? Books and Library stuff, 2012
<http://scarletlibrarian.wordpress.com/2012/11/06/what-do-es-embedded-librarian-mean/>
- 6) Holly M. Riccio. Embedded Librarianship : The Library As a Service, Not a Space.
<http://www.aallnet.org/mm/Publications/products/aall-ilta-whit-paper/embedded.pdf>
- 7) Amy Maule. Corporate Librarian or Corporate Climber? Information Outlook. 2009 Sep, vol.13, no.6, p11,13-14
- 8) David Shumaker. Disruption Alignment and Embedded Librarianship. SLA, 2014
<http://www.slideshare.net/davidshumaker/sla-spotlight2014-embeddedlibrarianship>
- 9) イーライ・パリサー. 閉じこもるインターネット——グーグル・パーソナライズ・民主主義. 早川書房, 2012 (原書 Eli Pariser. The Filter Bubble: What The Internet Is Hiding From You. Penguin Press, 2011)
- 10) ジョン・ヘーゲル 3 世. ジョン・シーラー・ブラウン. 視野

と経験を狭める「フィルターバブル」を打ち破れ. ダイヤモンド・ハーバード・ビジネス・レビュー. 2014.1.27 号

<http://www.dhbr.net/articles/-/2359> (原典 John Hagel III and John Seely Brown. Five Tips to Break Through Your Filter (s). Harvard Business Review, 2011 October 10)

<https://hbr.org/2011/10/five-tips-to-break-through-you>

- 11) David Shumaker. Disruption Alignment and Embedded Librarianship. SLA, 2014
<http://www.slideshare.net/davidshumaker/sla-spotlight2014-embeddedlibrarianship>

参考文献 (上記以外)

- 1) Jennifer Swanson. The Future of the Corporate Library. Information Outlook. 2014, vol.18, no.4, p10-12,24
- 2) Jenny Dale and Lynda Kellam. The Incredible Embedded Librarian. Library Media Connection. 2012 Jan/Feb, vol.30, no.4, p30
- 3) Jake Carlson and Ruth Kneale. Embedded librarianship in the research context. College&Research Libraries News. 2011 March, vol.72, no.3, p167-170

Special feature: Future of information professionals. Past and Future of Information Professionals in Corporate Environment: Rise of Embedded Librarianship and Its Challenges. Kyoko Toyoda (Burson-Marstella, Japan, 005-0022 6-3-3 Makomanai Kashiwaoka, Minami-ku, Sapporo)

Abstract: By comparing the work at Business Resource Center of a foreign-capital financial institution which I worked 20 years ago and the job I currently engaged in at a corporate communication agency, the change of information professional's role in corporate environment from information gathering to knowledge screening is reviewed. And introduce embedded librarians that have lately called significant attention in the U.S, and share how they emerged and how they were accepted by user groups. Then discuss the new role of corporate librarians, or information professionals, in dissolving the filter bubble.

Keywords: Corporate library / information professional / information gathering / knowledge screening / embedded librarian / filter bubble